

わらじ叢書 13

飯曲 豊

実	川
玉	川
飯	川
長	川
豊	
走	

わらじの仲間

このPDFは、一九八一年一月に発行されたわらじ叢書13のイメージを伝えるために作成しました。本誌は手書きの原稿を印刷したのですが、ウェブ配信の際の読み易さを考え、もとのイメージを活かし、一部をテキストデータとして新たに組み直しました。

わらじ叢書13 飯豊

昭和56年12月15日発行

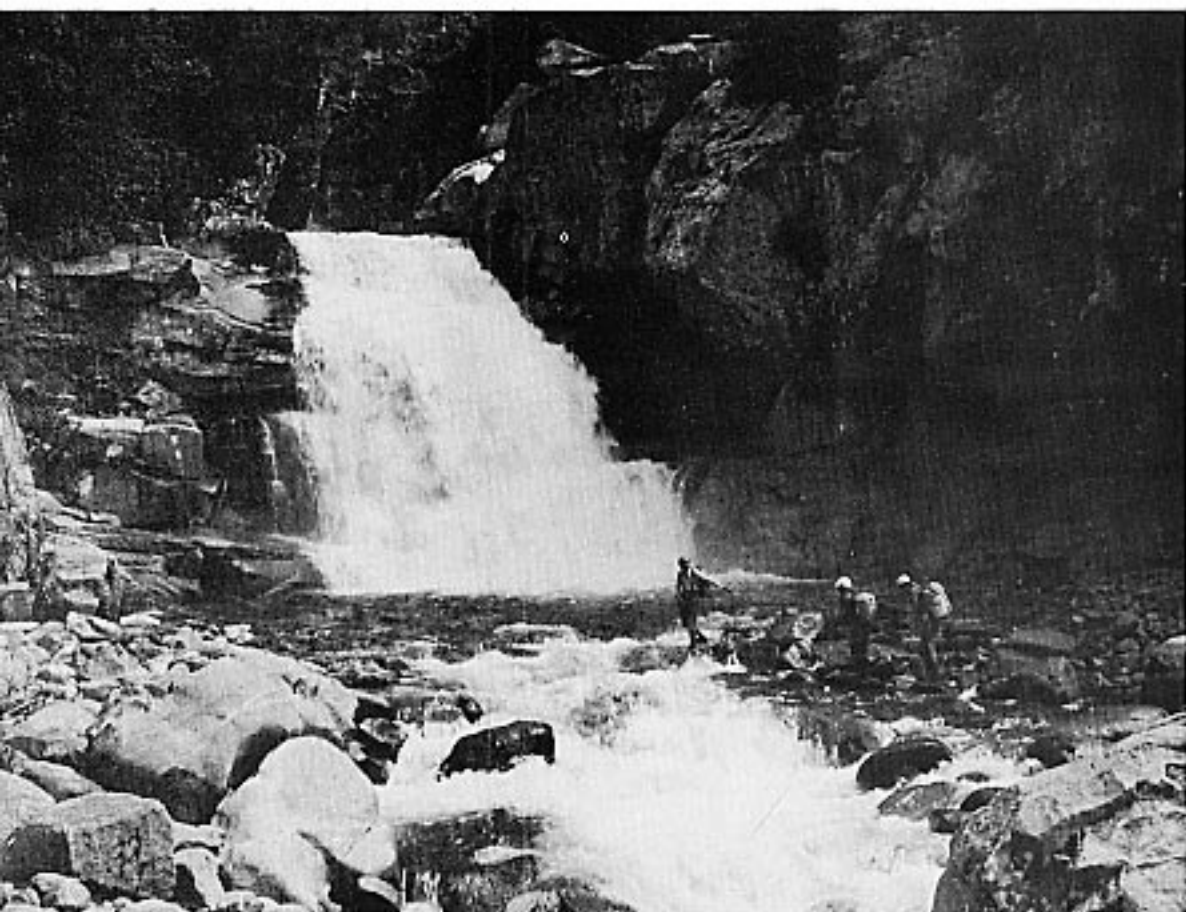
発行人 若林岩雄

発行所 わらじの仲間

田中茂雄気付

編集人 和井田一雄 橋本道夫

印刷所 株式会社実業広報社



▲前川 魚留ノ滝上段、若林



◀裏川 矢沢出合天狗橋、橋本

実川

▼前川の徒渉、若林





▲大又川を廻る, 田中(勝)

◀滝沢 梅花皮大滝, 小林

玉川



◀飯豊川北段川 百滝, 若林

▼松山沢 滝を攀る, 丸山





▲飯豊川 赤荒大滝、橋本

◀飯豊川不動ノ滝下流のゴルジュ帯、橋本

飯豊川

▼同ゴルジュ帯を泳ぐ、橋本





▼大滝でのスナップ、太田



▲飯豊川 不動ノ滝、橋本

◀大滝沢 核心部入口の大滝、若林

長走川

▼大滝沢 ゴルジュ器にて、鈴木(隆)



はじめに

若林 岩雄

「飯豊」という呼称は、たおやかな山容と、清涼な雪田を想い起こさせる。しかし、ゆったりとした主稜に鋭く喰い入る溪谷に目を転じてみると、そこには深いゴルジュと、蒼々とした淵で構成される別世界が展開される。領域としての空白はなくなってしまったとしても、中・

ある。収録した流域は、実川（前川・裏川）、長走川、飯豊川（飯豊川・北股川）、玉川（大又沢、桧山沢）の四流域となった。昭和五十五年の合宿の対象となった胎内川流域は、原稿収集の関係から、年報一九八〇年度版に夏山合宿報告として掲載を予定している。

下流域のゴルジュ帯は、様々な方法とルートを選択しうる自由な空間であることに変わりはなく、雪溪の消えた頃に漸く素顔を現わす上流域の瀑流帯や、沢筋の側壁群は、無限の可能性や楽しみを秘めているのではないかとすら見える。

また、掲載した流域においても、比較的密度濃くトレースし得た流域もあれば、本流の遡行に失敗するなど口惜しさのみが記録される流域もある。未トレースの流域は今後とも継続して通い続けることになるが、当会の飯豊の沢巡りの一ステツプとして、不十分な段階ではあるが取りまとめてもらったわけである。

私達の会では、飯豊連峰における地域研究の一貫として、昭和五〇年以來、夏・冬・春の合宿の多くを飯豊に設定してきた。この「わらじ叢書第一三号」は、これらの合宿のうちより、夏山合宿の記録、係報告、参加記等を集約したもので

飯豊からみれば辺境の地にある私達には、地域研究とはいっても、山行の記録を積み重ねうるだけである。飯豊をトータルに捉えるという点では、地元の方々

に比肩すべくもない。とても「研究」の一環などと銘うつことはできないが、飯豊の峡谷の魅力を少しでも伝えることができれば幸だと思う。

この叢書の記録は昭和五〇年から始まる。私の新人の時である。飯豊の沢巡りをリーダーとして担ってきた人達の中には現役を離れた人も多い。この叢書を手にとることによって、山行の楽しさを再度味わっていただきたいと思うし、後進である私達も報告者の顔を想い浮かべながら記録をなぞってみたい。

この叢書は、前代表の丸山さんの熱意、和井田さん、橋本さんの努力と、多くの人の協力によっている。手書きの印刷であるが、それだけに制作者の苦勞を忘れたくないと思う。

飯豊の沢 目次

はじめに

若林岩雄 1

I 実川水系

【記録】

前川本流（ヒンカカチ沢） 前川概説 7

上道沢 14

御面沢（牛ヶ首沢本谷） 16

東大日沢（松五郎沢） 20

入り島ノ子沢 21

松ノ木沢（オニベ沢） 24

ヨシワラ沢 28

大兵衛沢（鏡山）マナクホ沢 29

上ノアミ沢 30

下ノアミ沢 32

杵差岳（大日岳）縦走 33

上道沢を溯行して 34

夏山合宿で思い出すること 36

取り残されたアスミ 37

二年の夏山合宿 38

親指の思い出…… 39

湯ノ島小屋にて 41

【報告】

入山報告 43

気象報告 43

II 玉川水系

【記録】

槍山沢（本流）（カゴノ沢） 玉川概説 87

大曲リ沢 91

赤岳沢・無名沢（仮称） 93

槍山沢本流（本カ）丁沢左俣 95

大又沢本流（本社ノ沢） 100

本社ノ沢（御所沢左俣） 104

大岩沢 105

滝沢（梅花皮大滝） 107

握川尾根（杵差岳）丸森尾根 111

石転び沢（丸森尾根） 112

玉川（大又沢）日記 113

夏合宿を終えて 115

停泊の日々 116

玉川合宿デント日記より 117

【参加記】

III 飯豊川水系

【記録】

飯豊川本流（文平沢） 飯豊川概説 121

適谷沢 126

大日沢 128

飯豊川本流（地蔵カル沢） 130

赤沢沢 132

飯豊連峰地域研究のアプローチ 和井田一雄 51

【記録】 豊川本流ノ倉沢下降 豊川概説 53

三杯汁沢 58

豊川本流(メッケ穴沢) 62

烏帽子沢 65

矢沢 67

【参加記】 初めての飯豊合宿 72

疲れた豊川 74

暑かった豊川 76

長かった豊川 77

豊川参加記 79

金子一郎 80

豊川は思い出

Ⅱ 長足川水系

【記録】 長足川概説 173

長足川白濁沢 174

赤坂け沢 178

大滝沢 181

夏山合宿気象報告 185

初めての夏山合宿 186

川を渡る 187

長足川の南の中で 188

【報告】

【参加記】

洗濯沢中ノ沢 133

赤谷沢 135

黒沢ノ桶取沢 137

飯豊川下部と湘行し不動ノ滝を大急ぎするの記 143

北股川本流(財布沢) 144

北股川鮎倉沢 148

三国岳ノ北股岳縦走 154

【参加記】 初めての飯豊 156

飯豊の感想 159

新人の体験(鉄砲水のこと) 160

夏は絶対沢だノ 161

夏山合宿進感 163

飯豊川から帰って 163

焚火は焚き 165

田中勝治 166

関根幸次 167

後編報告 170

【報告】

湯ノ平温泉今昔

湯ノ平温泉のこと

飯豊連峰を巡る溪谷の名称について 和井田一雄 189

飯豊夏山合宿の歩み 橋本道夫 195

お世話になった地元の方々

編集後記

203

202

図版目次

【実川水系】

実川水系概念図	6
前川本流（ヒニカゲチ沢）	11
御面沢（牛ヶ島沢本谷）	19
入リ島ノ子沢	23
松ノ木沢沢	27
オンベ沢	28
上ノアシ沢	31
裏川本流（櫛ノ倉沢）	56
裏川本流（三杯汁沢）	60
裏川本流（メツケ穴沢）	63
烏帽子沢	66
矢沢	71

【玉川水系】

玉川水系概念図	86
桧山沢（本流）（カゴノ沢）	90
森岳沢・無名沢	94
本刀ゴ沢左保	99
大又沢本流（本社ノ沢）	102
梅花皮の大滝（等々力）	109
梅花皮沢滝沢	110

【飯豊川水系】

飯豊川水系概念図	120
飯豊川本流（文平沢）	124
滝谷沢	127
大日沢	129
沈瀬沢中ノ沢	134
赤谷沢	136
黒沢	141
福取沢	142
北股川本流（財布沢）	146
北股川下部	153
北股川鮎倉沢	154

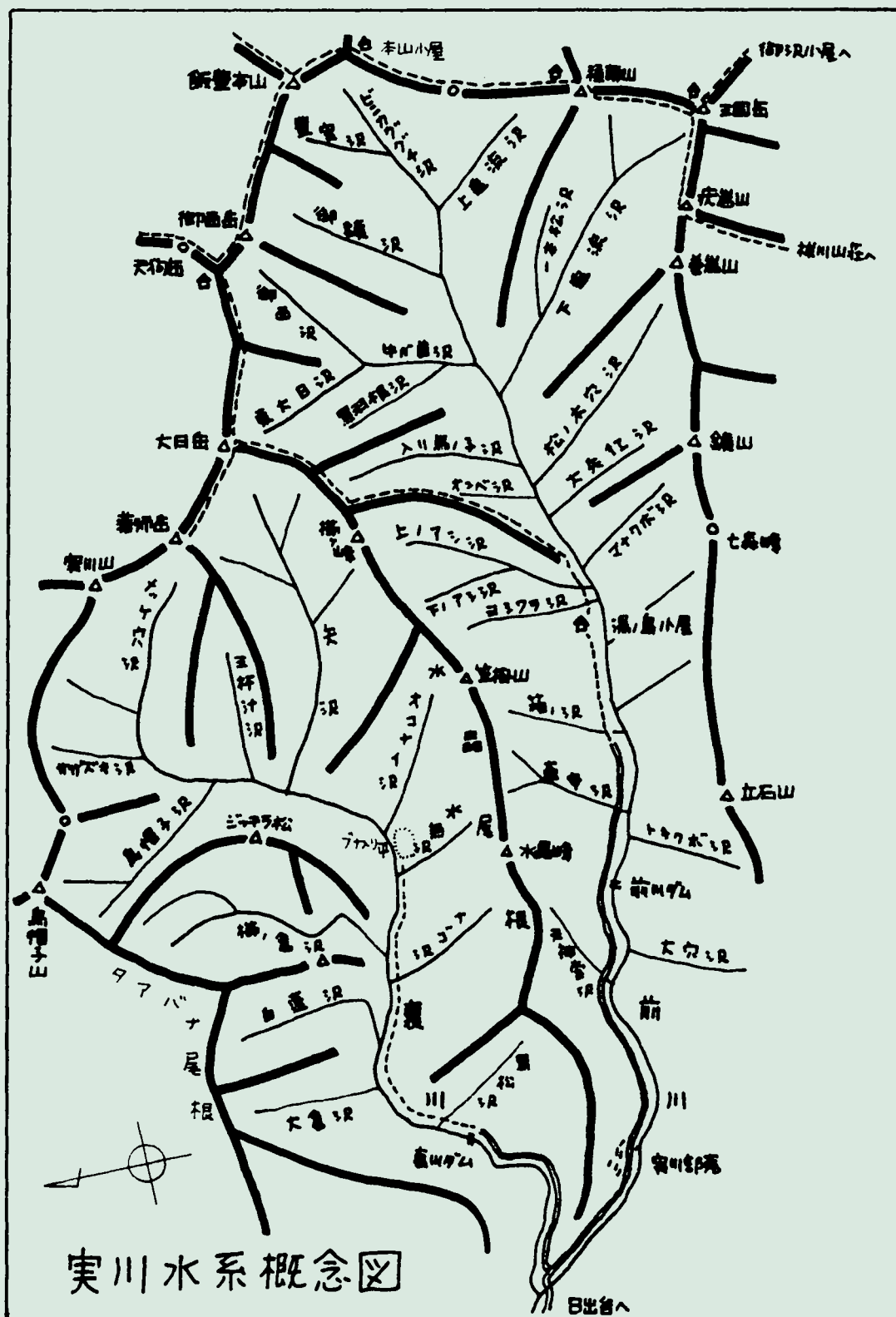
【長足川水系】

長足川水系概念図	172
白滝沢	176
赤坂沢	180
大滝沢	183

図版作成	橋本進夫・中野陽一
表紙作成	中野陽一
カット	山崎博子・中野陽一

実川

水源は飯豊山より出づ。
山中を屈曲して西に流る。
ること九里計り、所々の
溪流より注ぎ、流れ急に
岩高き荒川なり。後川は
源を大日岳と烏帽子岳に
發し、山間を西に流る。
こと八里計り、村西二十
町計りに到り、前川に合す。
これより下流を実川と言
ふ。(金澤風土記)



前川概説

飯豊本山、御西岳、大日岳といった飯豊連峰の核心部に発して南西に流れ、磐越西線日出谷付近で阿賀野川に合流する実川は、飯豊南面を構成する一大水系で、東縁を三国岳より鏡山、七森峰を経て高陽山に至る稜線、北稜を飯豊主峰群を連ねて大日岳より西へ派生する烏帽子尾根、そして尾根上の岩峰烏帽子山より南下するタアバナ尾根を西の境界とする非常に広い流域面積を持っている。

実川は、大日岳より櫛ヶ峰を経て南走する水晶尾根を隔てて、東側に「前川」西側に「裏川」が並行して流れるが、その名の通りに同一水系にありながら対称的な性格を持つ。飯豊西面特有の深く刻まれた険悪なゴルジュと滝場で構成され

た裏川が、幽幻とも言える趣を呈しているのに対し、本流とされる前川は、東南面に位置し、全体として花崗岩質のためか白く明るい岩肌と、偏東積雪風の影響で遅くなるまで残る雪溪の豊富な雪溶け水によって豪放な谷歩きの領域である。また主稜線に近く、古くより飯豊山神社の登拝路が拓けていたのも、下降路の問題等から今なお原始性を保つ裏川と対称的である。

七森峰周辺に冠せられた地名の幾つかからも予想される様に、地元民は残雪期熊狩り等で広くこの流域を歩いていたと思われるが、いわゆる登山としての溯行は、昭和六年八月の旧制第二高校（現東北大学）山岳部の田名部繁らによる牛ヶ首沢溯行が最初であろう。その後もこれから学校山岳部に混じって地元山岳会の踏査が試みられたが、本流（ピンカガチ沢）完全溯行は昭和三〇年八月新潟峡彩

山岳会によってであり、右岸の支流の一応のトレースはなされたものの、詳細な記録も不明なものが多く現今なお溯行者の少ない静寂境である。

入山の起点は磐越西線日出谷駅である。実川島で阿賀野川と別れ、実川部落を経て約二〇km上流の箱ノ沢出合まで林道が通じている。林道の通行状況にもよるが、頼めばタクシーが入ってくれる。四〇分。箱ノ沢出合からはさらに徒歩一時間で湯ノ島小屋に着く。小屋はヨシワラ沢出合の撫林中にある約三〇名収容の無人小屋で、近くには広い幕营地と水場があり環境良好である。通常、湯ノ島小屋上流が前川の溯行対象であり、またここを起点に大日岳へオンベ松尾根登山道が通じているから、ベースキャンプ地としても最適である。

裏川概説

飯豊連峰の最高峰大日岳付近に端を発する裏川は、随一の雄大さと未開性をあわせ持つ。大日岳より櫛ヶ峰を経て南下する尾根と、烏帽子山から筆塚山へと至る長走川との分水界とに挟まれた流域が刻み込んだ溪谷は、豪壮なゴルジュや滝を蔵し近代的登攀技術などあざわらうが如くであり、一方尾根は、主稜線大日岳付近を除きいずれも越後特有の密藪に守られて下降路の確保も困難である。

この流域がいわゆる近代的登山の対象となつたのは昭和初年のことで、昭和七年東北帝大山岳部鈴木岩雄氏らによつて本流（メツケ穴沢）及び矢沢に記された足跡を嚆矢とする。以来、三杯汁沢、キンカ穴沢、烏帽子沢等の溯行記録が散見

するが、いずれも詳細は不明であつたり、あるいは大高巻きの連続であつたりで、その全貌は明らかにされていない。昭和四〇～五〇年代に至つて新潟ないし近県の諸山岳会により主流のトレースがなされたが、未だ未知の部分を多く残す流域といつてよい。アプローチは、実川本流の前川と同様、磐越西線日出谷駅から車で実川橋、あるいはその奥の裏川ダムまで入り、ここより左岸どおしにつけられた踏跡を辿れば、途中不明瞭なところもみられるが、水無沢まで容易に達することができ。この踏跡を利用せずに白蓬沢付近より入谷するのも一興だが、この間の本流は大規模な廊下を連ねていて極めて困難な溯行となることを覚悟すべきである。

記 宮内 幸男



玉川

小国谷の南極に当り、会津・越後の州郡界をなし、雄大朝日岳に對比すべし。項点を三国岳と言ひ、凡千八百八十米、玉川より南に上る三里半、小玉川と言ふ、猶三里にして湯太沢に到れば熱泉あり、小玉川の山中に梅花皮の滝あり、高三丈、一書に比に寒水石と出ずと見えたり、
(会津風土記)

[illegible]

玉川概説

玉川は、飯豊連峰主脈の種蒔山から飯豊本山、御西岳、烏帽子岳、北股岳、頼母木山に連なる稜線の山形県側に流下する流れをことごとく集めて北流し、米坂線、玉川口駅付近において荒川に合流する連峰屈指の水系である。源流は大別して松山沢、大又沢、梅花皮沢に分けられるが、いずれも上部は連峰北面より北東面に当たり、冬期多量の積雪があるため盛夏に至るもなお長大な雪渓を有し縦走路からも明瞭に眺められるものである。その中でもとりわけ梅花皮沢は、その本谷に有る石転び沢の大雪渓によって特に有名であり、北アルプスの大雪渓に匹敵する規模（長さ三〇〇〇m、高度差一〇〇〇m）を有し、主脈への最も興味ある登山路としてよく登られている。こ

れに対し松山沢、大又沢は山菜採り、釣師等の踏跡が断片的にある程度で、一般登山路は整備されておらず、沢登りの領域となっているが、飯豊連峰を巡る多くの溪谷の中にあつては比較的易しく、初級〜中級程度とされている。これはアプローチが比較的短い事、雪渓が多い事、側壁の発達があまり顕著でないため高巻きが比較的容易な事によるといえる。また、突き上げ地点がほとんど縦走路、登山路であり下降が容易なこともその要因といえよう。温身平より梅花皮沢沿いに登り石転び沢を詰めて主脈の十字鞍部に至る道は、他の溪谷に比べて特に悪罵もなく歩き易いため、古くから地元の猟師等によって歩かれていたと推定されるが、登山者によって歩かれたのは、一九二六年五月末、旧制第二高等学校山岳部の佐々保雄他八名によるものがその最初であろう。沢登りの対象として又、パイオニアワークの実践としてこれ

らの溪谷に足を踏み入れた登山者の足跡としては、一九二六年七月、同じく旧制第二高等学校山岳部の杉原五郎他六名による松山沢の偵察、一九三一年七月、旧制山形高等学校山岳部の桜井敏夫他五名による松山沢（赤岳沢）及び大又沢（大岩沢）の溯行、そして一九三六年七月、飯沼潔水他三名による大又沢（御秘所沢）の溯行などが初期のものである。特に飯沼らによるそれは、日本山岳会機関誌『山岳』に発表され、登山界に玉川源流の溪谷の姿を初めて紹介したものととして特筆すべきものである。これらの溪谷の開拓に力を入れた山岳団体には、地元旧制山形高校山岳部、旧制二高山岳部、旧制新潟高校山岳部などがあり、主要な溪谷の大部分がトレースされたが、社会人によるそれは主として戦後になってからである。

滝沢

一九八〇年八月九日～八月二一日
L. 渡辺輝男・小林隆徳

八月九日

新発田駅より友人の車で直接温身平へ。思ったより早く一時間半で着く。パッキングを終え、のんびりと雪溪末端のテントサイトまで二時間半。途中、工事中で高巻きのアルバイトをさせられる。ベースを設け、午後から大滝のルート工作へ。雪溪は大滝下まで続いており三分程でF1（四五m）に出る。玉川自体は水量が少いものの真近に眺める大滝はさすがに迫力があり登攀意欲をそそられる。右岸のスラブにルートをとることを決めバンドまで直上した後、スラブを落口までトラバース。そのままF2（三〇m）

を回り込む形で側壁を登り左の凹角から落口へ。ここは広いテラスになっており正面に梶川尾根を見て高度感もあり、気

持の良い所だ。F3（二五m）スラブ状は上部が細かい。ザイルを二本しか持つてこなかったのだからひき返すことにしていたのだが、ついではかりに取り付く。滝の中程から左上し更に水流の左を直上するが傾斜もありバランスを要す。F4を偵察した後、F2・F1のトラバースの二箇所にはザイルをフィックスしベースに帰着。

八月一日

昨日の感触から今日は大滝を抜けるだろうとの予測で食料三食分とツェルトを加えアタックに出る。大滝から上は雪溪歩きで稜線に達するだろうとの考えで立てた計画だったが甘かった。大滝下までは三〇分。そのまま昨日のルートを辿り

F3上に出る。一休みの後、F4に取り付く。ルートは釜の左の磨かれた凹状にとるがフリクションが効かずザックを降ろし空身で登る。今にも滑りそうな両足を堪えバランスで直上し壁に体を抑えられたところで水流へトラバース。細かいので荷があると辛い。水流の中のホールドを拾い小テラスへ。上部は左の窪から落ち口へ。F5（一〇m）は梶川尾根や下からは見えない位置にあり今まで五段二〇〇mと言われていた大滝は訂正する必要があるだろう。左からはずり水流に出るが、かぶり気味のため、体が横にふられていやらしい。ホールドをつかんで強引に出る。落ち口も同様。びしょ濡れから開放されるとF6（五〇m）の下は小さな河原状になっておりツェルトを張る。真下で見る直瀑の大滝はすさまじい迫力で水しぶきは二〇m程離れた所にも飛んで来る。落ち口は空との境界を描いており、さながら空から水が流れ出ているようだ。飯豊の剣沢大滝版か。ルートは右壁のチムニー状になっている窪に

とれそうである。壁の中程から取り付きトラバースするつもりでいたが、所々完全にかぶっており、おまけに濡れた草が付着している為、上に追い上げられる。

降りるに降りられない状態になり途中効きそうにもないボルトを三本前進用不安定な状態で埋めやつの思いで上部のブッシュバンドに達する。そこから上に出ることも考えたが垂直の壁が上まで続いており、あきらめアップザイレンで下に降りるが、ほぼ空中懸垂となる。なんとザイルを四〇m伸ばすのに四時間かかる。半日の苦労が無駄に終わったくやしさに何としてでも窪までトラバースし、ルートを確かめようと一休みした後、再度取り付き左上してバンドを指す。ボルト三本をブレイ用に埋め、やつのことで外傾したバンドに立ち窪状に達する。ザイルフィックスし壁から開放される。

八月一日

今日のピッチが核心部になりそうなの

で信頼できるブレイピンを打ち登攀に移るが出だしが垂直で悪い。外側の細かいスタンスを拾いツツパリで抜ける。以後、忠実に窪状を辿るが傾斜があり慎重にザイルを伸ばす。チムニー状に入りホツとするが落ち口へブッシュトラバースにする地点で残置を発見。今まで一本の残置もなく形跡もなかったことから残雪期のものであるうか。それともすでに登られているのか。とりあえず残置のある右のバンドに入りピッチを区切る。最後のトラバースは一旦チムニーの出口まで戻り左のブッシュに移るが両足はツツパリで体を支えている為、辛い。指先のかかるアンダーホールドを頼りにバランスをくずさないようにゆっくりと体重を移動しブッシュをつかむ。後はブッシュをホールドにして落ち口へ。ようやく梅花皮滝を足下にする。ガチャを整理し、後は雪渓歩きとばかりに乏しい行動食を口に入れ歩き出すが右岸から枝沢を二本入れた後、雪渓が寸断され二段滝（二〇m）が顔を出す。雪渓下のゴルジュは廊下状を

成し側壁はスラブで尾根近くまで続いている。右岸をトラバースし次の雪渓へ。一〇〇m程歩くがここから先は随所にブロックが崩壊し溯行不能となる。側壁も巻けば尾根まで追い上げられ、それにもましてすごいのは雪渓下のゴルジュで五m幅の廊下状を成し両側が五〇m程垂直に立っている。その上にスラブが続いている訳だ。このゴルジュが先程の雪渓から続いている様子で所々廊下をふさぐ形で滝をかけ、この先も続いている。結局、左岸のスラブを登り石転び沢との中間尾根一六三七mピークにヤブを漕ぐ。すぐさま枝沢を下降し暗くなった石転び沢をベースに帰着。

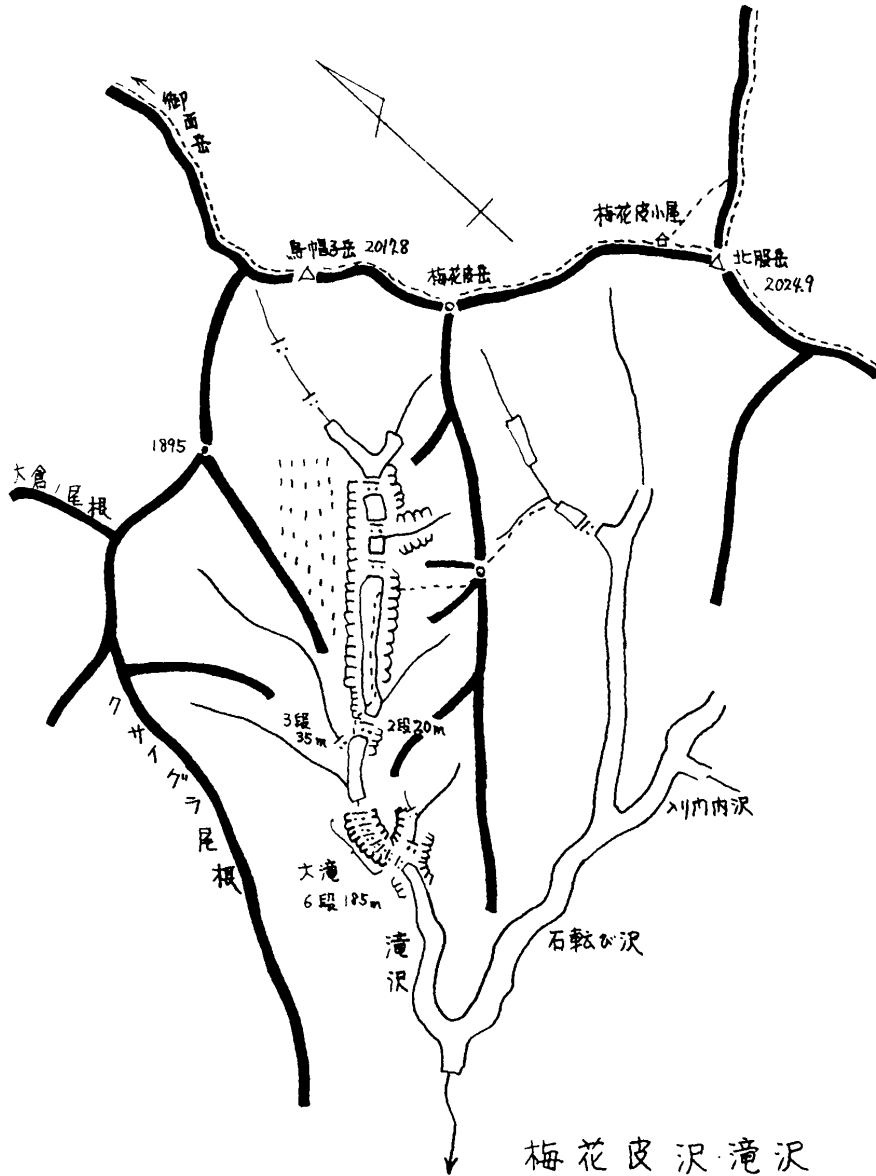
今回の滝沢は溯行とはいえず大滝の登攀が中心となった。それは大滝から上部を甘く見た落ち度ではあるが結果的にはシーズン中の溯行はブロックの崩壊するゴルジュ故に不可能である。滝沢は飯豊の中においてもその絶悪さは折紙つきのものであるうし完全溯行には雪渓が完全に消える時を待たねばならない。更に逃

げ場のないことから最低三日の好天は必要であろうし、かなりの力量をもったパーティに限られる。しかし上部の溯行は別として大滝自体が登攀のおもしろ

さを提供しており飯豊の中でも興味深いルートの一つであろう。大滝は一日で抜けることが可能であり、アップザイレンで降りれば日帰りも考えられる。なお、全

体に有効なリスに乏しく岩は硬い。残置はビレイ用にボルト一〇、ハーケン二。

(記 渡辺輝男)
(コースタイム) 省略



梅花皮沢・滝沢

作図 渡辺輝男

川 豊 飯

滝谷温泉（湯の平温泉）
 炭酸泉、百五十度の熱泉
 にして、文久年中、浴槽
 客舎を置く、村家を離れ
 一嶺を越え、四里余の空
 山に懸在し、幽僻極まる
 飯豊川の溪畔にあたり、
 飯豊山の西北、二王子山
 の南とす、大日本地名
 辞書）

[illegible]

飯豊川概説

飯豊川は飯豊連峰の主稜御西岳に水源を発し、オオインの尾根をはさんで、一大支流である北股川をあわせて西流し、東赤谷駅と出会うあたりで北西に流れを変え、更に内ノ倉川を併せ阿賀野川に流入するという飯豊連峰最大の峡谷である。飯豊川の特徴は上・下流域に圧倒的なゴルジュ帯をもつことである。上部ゴルジュ帯は、残雪により埋まっていることも多いので溯行の興味はむしろ下部ゴルジュ帯の溯行や一〇本以上の支流の溯行にあると言えよう。一方北股川はV字状に発達したスラブで構成されたゴルジュとなっており、多くの巨瀑を秘めている。飯豊川本流の夏期初溯行は、一九三六年、旧制二高山岳部によるものと思われる。本流から天狗沢を経て

御西岳に達したものである。しかし、本流はじめ各支流の状態が明確にされるようになったのは一九五七年、新潟県彩山岳会による大日沢初溯行以来である。同会ではこれを契機に流域の各支流を集中的に廻行している。北股川本流の夏期初溯行は一九五〇年八月、地元の下越山岳会によるものと思われる。それ以前にも探訪が続けられていたが詳細は明らかではない。入山は赤谷線の東赤谷駅であるが、駅周辺には交通機関が全くないため、車を確保する必要がある。車なら右岸沿いの林道を掛留沢手前まで一時間で、さらに湯ノ平山荘まで徒歩で四〇分位である。タクシーだと新発田駅から入らなければならぬので車の確保を新発田市観光課に問い合わせておくといよい。市営の湯ノ平山荘は飯豊川源流への根拠地として最適である。山荘前はキャンプサイトとなっており、野趣に富んだ露天風呂がある。オオインの尾根下降は梅花皮小屋

から湯ノ平山荘まで四時間である。飯豊川下流の左岸の沢は、隣接する沢の下降かオオサンカイ尾根の下降がよい。同尾根は一九七四年、新潟県彩山岳会により拓かれたもので、蓬沢支流のホウジョウ沢上部よりナタ目に沿って下るもので、烏帽子山より約七時間で飯豊川本流へ降りることができる。

記 橋本 道夫



飯豊川本流（文平沢）

一九七八年八月五日～八月九日
L. 橋本道夫・渡辺輝男・木崎幸男

八月五日（晴）

当日になり赤谷沢パーティの和井田君が行けなくなった為、赤谷沢を中止し、三名で本流に入る事にする。東赤谷駅より笹島さんの車で掛留沢手前まで入り右岸の林道を三〇分で湯ノ平温泉に着く。彼には入下山併せて四回の送迎をしてもらうことになった。車の確保が一番頭の痛い問題であつたので大いに助かつた。山荘前にアンナプルナを設営し一〇時二〇分出発。管理人によれば巻道を使うと四～五時間で不動ノ滝を越えられるとのことであつた。本流を釣りをしながら進む高和パーティと別れ、我々は予定通り巻道を使うことにする。巻道は部分的に断続しておりヒルカルが悪場付近より踏跡不明となる。ヒルカルは右岸の

ブッシュ混じりの草付をトラバースするが意外に悪い。二人とも大きな沢は初めてであつたのでバテてしまう。小林パーティと合流後、懸垂三〇mで本流に降りゴルジュの真中でビバークする。

八月六日（晴）

心配していた二人も体調を回復し溯行開始。見事な廊下が続く。しばらくすると沢は右に曲がり大瀨四〇mが現われる。少々冷たい泳ぎで突破する。我々はライフジャケットを持参しなかつたのでザイルが足にからんで困つた。続く瀨も右より腰までつかり通過し、なおも徒渉が続く。やがて沢は再び右に曲がり不動ノ滝五〇mが現われる。予想していたより小さな滝だがその側壁と水量はさすがである。右岸の脆いリッジを登り落

口上部まで高巻き枝沢を下降する。約三時間。滝上は一変して広い河原となる。一二時の交信で本流を忠実に溯行してくるはずの高和パーティが逆に左岸を高巻き中であることがわかる。洗濯沢で小林パーティと別れ先を急ぐ。三〇分程で快適そうな大滝をかける赤渋沢出合に着く。すぐ大釜を持つ四m滝が現われ本流は通過不能と思われるゴルジュとなる。偵察するがブロックの流れてくるのを見て早々に退散。赤渋沢の出合で焚火をして快適な一夜を過ごす。

八月七日（晴）

右岸の小沢を一〇〇m登りやぶをトラバース。本流はすぐ左に曲がりスノーブリッジが断続している。しばらくやぶをトラバースし三〇mの懸垂で雪渓上に立つ。雪渓は三〇〇m続き二回の懸垂で沢床に降りる。ちょうど左岸の壁には幅三〇cm位の黄鉄鉱らしきバンドが走っている。釜を持つ四m滝は泳いで取り付き右より登り、続く六m滝も右より登ると再び雪渓となる。右から一ピッチで雪渓上

に立ちしばらくすると出合にチムニー状の四〇m滝を持つ地蔵カル沢が左岸より出合う。雪溪の断続する中、大日沢、滝谷沢を過ぎると右岸に顕著なピナクルが見えてくる。右岸のやぶより懸垂二五mで雪溪上に降りる。この雪溪は本流を埋めつくし天狗沢の先まで続いていた。本流は左右に激しく屈曲し兩岸のスラブは圧倒的である。特に右岸より三段六〇m

(最下段二〇mは雪溪下)を持つ小沢を過ぎた辺りの左岸のスラブは数百mせり上がり見事である。飯豊川のコル部は雪溪で埋まっている為はつきりしないが、側壁で見る限り滝谷沢から天狗沢手前までと思われる。九月頃溯行したらおもしろいだろう。天狗沢を過ぎると溪相は一変し穏やかとなり今までの圧迫感から解放される。相変わらず切れ目なく雪溪が続き大きな二俣となる。右俣が文平沢で左俣が御西沢である。大滝のかかる文平沢に入る。

大滝五〇mは雪溪に二〇m程隠れている。雪溪より右岸の壁に飛び移り浮石と

ブッシュ混じりの壁を二ピッチで滝上に立つ。すぐ六m、五mと連続しいずれも右より登ると雪溪に埋まった広い二俣となる。更に手前左岸よりガレ沢が入っている。左俣は流木とゴロであるので右俣に入る事にし雪溪上でビバーク。

八月八日(晴)

連続するC・S滝を右から巻き七m、八m滝を越えると沢は右に曲がり、快適な連瀑帯(五〜一〇m)が続き一気に高度を上げる。八時の交信で小林パーテイとも連絡がとれ快適な溯行を続け二〇分程のやぶこぎで稜線に飛び出す。大日岳をピストンし御西小屋に泊る。文平沢は本流とは異なり圧迫感もなく快適な沢であった。

八月九日(晴)

稜線散歩でオオインの尾根より湯ノ平温泉に降り一風呂浴びビールで乾杯する。

(記 橋本 道夫)

(コースタイム)

八月五日 東赤谷駅(七時四〇分)掛

留沢手前(八時五分〜一五分) 北股川出合(八時二五分) 湯ノ平山荘(八時五〇分〜一〇時二〇分) 蓬沢出合(一一時四〇分) 黒沢出合(一二時一〇分) ビバーク地(一二時三〇分)

八月六日 ビバーク地(七時) 滝見沢

出合(八時四〇分〜九時一五分) 不動ノ滝上(一二時二〇分〜一三時一〇分) 孫左エ門沢(一三時四五分〜一四時) 赤谷沢(一四時二五分) 洗濯沢(一四時三五分〜一五時) 赤沢出合(一五時一五分)

八月七日 ビバーク地(六時三〇分)

地蔵カル沢(一二時一〇分〜四五分) 大日沢(一三時一五分) 滝谷沢(一三時四〇分) 天狗沢(一五時四五分) 二俣(一六時) ビバーク地(一七時四五分)

八月八日 ビバーク地(七時一〇分)

交信(七時四五分〜八時) 稜線(一二時二〇分) 大日岳(一〇時五五分〜一二時四五分) 御西小屋(一二時五時)

八月九日 御西小屋(一二時) 湯ノ平

の池(一二時) 梅花皮小屋(一二時〜五〇分) 湯ノ平温泉(一六時二〇分)

川走長

鳥帽子岳、村より北面の
 才二里十八町計りにあり
 高二里計り、水も大日
 岳の南に続きたる高山な
 り、頂上は岩山にて四時
 雪あり、五葉松、樺、熊
 鞭牛多し、
 霜消山、村北三里計りに
 あり、一に蒜場山と言ふ
 頂まで二里山中に沼多し
 深山にて人刻ること稀な
 り（会津風土記）

長走川概説

長走川は、大日岳より西に派生する稜

線上の岩峰烏帽子山に源を発する。流域は、烏帽子山、高立山、蒜場山へと続く一〇〇〇～一五〇〇ヨの山々と、裏川との境界をなすタアバナ尾根に囲まれた流域で、飯豊の主稜線を水源とした他の溪谷に比べ、流域は比較的狭い。本流は「十三滝」で知られた大滝沢で、赤抜け沢、白滝沢、杉ノ沢を合わせ長走川として西流し、さらに、蒜場山に水源を持つ大面沢、深沢などの水を集め新谷川と名称を変え、新谷ダム、新谷部落を経て、磐越西線白崎駅付近で阿賀野川に流入している。

長走川の特徴は、上部に連続した瀑流帯を持つことである。一般に、飯豊の主谷は中下流域に深いゴルジュと瀧を

持ち、源流は雪溪、お花畑によって稜線まで導かれる沢が多いのに対し、長走川の各沢は上部ほど瀧とゴルジュの発達が著しく、溯行の興味もこれらの瀑流帯の処理にポイントがおかれる。

長走川の初溯行は、一九四九年八月の東蒲原山岳会のパーティとみられ、本流（大滝沢）から烏帽子山に至り、タアバナ尾根、焼曾根山から裏川へと下降した記録を残している。それ以降、郡山山岳会、新潟峡彩山岳会など地元山岳会によって探訪が続けられているが、飯豊の主稜線からはずれた前衛山塊であること、アプローチの不便さ、稜線上に夏道がなく下降も困難であることなどの理由から溯行者の数は少なく、現在でも源流域はブナ林の原生林に覆われた秘境地帯の趣を強く残している。

入山は通常、磐越西線日出谷駅から水沢集落、上ノ峠を経て、長走川の黒沢出合付近まで開かれた林道が用いられる。

日出谷から車で一時間ほどであるが、大雨の後などは上ノ峠手前で通行不能となる場合がある。日出谷から歩くと四時間はみておかななくてはならない。

下降路は尾根の数をこぐか、沢の下降である。烏帽子山の稜線、タアバナ尾根は、いずれもかなりの数こぎを強いられる。そのため、今までの記録においても下降ルートは一定ではなく、①初溯行時の下降ルート、②大滝沢と白滝沢を分ける逆サ尾根から二俣へ戻るルート、③飯豊川方面のオーサンカイ尾根、又は飯豊川左岸の沢を下降し湯ノ平温泉への道に出る、等のルートが採用されている。

この中で、飯豊川支流の蓬沢ホウジヨウ沢源流からオーサンカイ尾根を下降するルートが一九七四年新潟峡彩山岳会によって開かれており、鉦目を見失わない限り、烏帽子山より約七時間で飯豊川へ降りることができる。

白滝沢

一九七九年八月四日～九日
L. 若林岩雄・横山厚・竹内正夫

白滝沢

一九七九年八月四日～九日

L. 若林岩雄・横山厚・竹内正夫

長走川は大日岳より西に派生する稜線上の岩峰鳥帽子山に源を発する。流域は、白滝沢の下流域は比較的平凡である。ゴルジュ帯も出合を除くとほぼ通過できる。しかし上流域は顕著なV字谷となり滝が連続し快適である。但し稜線のヤブは相当なもので、ヤブ山派は嬉し涙をこぼすだろう。

八月六日（曇り時々雨）

大滝沢、赤抜け沢パーティと別れ白滝沢へ入る。入山以来雨にたたられっぱなしで、健闘を誓い合うという雰囲気ではなく、「まあ仕方ない行きますか」という調子である。出合は連瀑となつてお

り八m、一五m、三mの滝を左より巻き、続く五m滝、小滝数本を越えると一転しておだやかなゴーロとなる。しばらくしてゴルジュ帯となるが、いずれも断続的でヘツリと腰位の徒渉で通過できる。大滝沢との出合から約二時間位で右岸にガレをみせ小沢を合わせるとようやく中流域の核心部的様相となり、中三m、長さ二〇mのゴルジュを泳いで通過する。しかし、それも束の間、沢筋は再び散慢な様相となる。泳ぎの下手な僕はライフジャケットを着こんではりきったが、本領発揮とはいかず、むしろ保温用ジャケットとしてのニュアンスが強い。実際暖かく、泳ぎも雨もそれ程苦にならない。一〇m滝を左の凹角から越え、いくつかのナメ滝を通過すると引き上げ沢出合と

なる。ここまで約五時間である。引き上げ沢から上も同じような溪相が続くが、次第にゴルジュ状になり、沢身には巨岩が滝状に重なるようになる。すると、突然左から白糸のような滝が落ちてくる。高さも二五mはあり、見ごたえがある滝だ。実際どう言うのか知らないが、この滝は「白滝」と名づけるにふさわしい華麗さをもっている。本流はこの滝で、正面はガレが稜線へと続いている。時間は一六時近かったが直登することにする。ルートは左側壁で、下部一〇mはフェース状、上部は急なスラブとなっている。ハーケンとブッシュでランニンググレイをとりながら空身で登る。直登は難しくはなかったが、この後が良くない。ザックを荷上げしようとザイルを投げたところ、ザイルが滝つぼの中で岩にかんてしまう。仕方なく五mほど切り捨てる。思わぬミスをやってしまった。続く三m、八mを巻くと、沢筋は顕著なV字状となり、兩岸は急な草付スラブになる。時間は一七時を過ぎビバークサイトを探

すが適地はなく、水流から一mほどの台地にツェルトを張る。前日の降雨でも冠水していなかったようだが、なんとなく心配で二五m上の灌木帯までザイルをフィックスする。ザイルには二mおきにコブをつくっておく。夜半時々強く雨が降り、その度に水量を確認する。幸いなことに逃げだすまでにはならなかった。

八月七日（曇り） ビバーク地から一五分ほどで二俣になる。左俣は出合に二五mのナメ滝をもち、その上に大スラブ帯が広がっている。右俣は高さ三〇mほどのゴルジュとなる。水量が多く、シャワークライムで滝を直登するというわけにはいきそうもない。まず五m滝は左壁にボルトを一本打って越える。続く一五mのチムニー滝は水量に圧倒され、左岸のルンゼから高巻き滝上に出る。この上からはナメ小滝が連続するようになり、稜線近くまで一気に高度を上げる。ヤブこぎもほとんどなく、タアバナ尾根に一時一五分突き上げる。約一四二〇mの湿原がある地点であった。ここから小

鳥帽子直下のザレ地帯まで(脇)級プラスのヤブこぎとなる。小鳥帽子に着いたのが約一五時。交信の間にガンコウランの実を味わう。鳥帽子山に着く頃はガスが濃くなり、ルートに自信がもてなくなった地点でヤブを切り開きビバークとする。なお、一二時の交信で赤抜け沢、大滝沢、鳥帽子沢の各パーティと連絡がとれる。

八月八日（曇りのち晴） 現在地を確認すると鳥帽子山の肩であった。そのうち視界もきくようになる。ここからは新潟峡谷山岳会によって切り開かれた踏跡がでてくるようになる。北峰から蓬沢への下降をはじめが途中から踏跡をはずしてしまい、強引に降りていくと蓬沢の左俣ではなく右俣にでてしまう。二俣までは二回の懸垂を必要とした。また、滝つぼの中にカモシカの死体らしき毛のかたまりがあった。蓬沢に一〇m滝とゴルジュが現われる地点まで下降し、そこからオーサンカイ尾根の一五〇m地点まで約一〇〇mほど登る。あとは立派な切り開きに従って降りる。踏跡では

なく道と呼んだ方がびったりする。飯豊川の徒渉点まで約四時間であった。飯豊川の徒渉は水量が多く難渋する。後続のパーティは大ヤット沢の出合を渡ったようだが、我々は夕方の増水時で踏ん切りがつかず、大ヤット沢出合の下の小ゴルジュを降りた地点で徒渉する。最後の難関であった。なお、状況次第であるが、ザイルをつけて渡る場合セカンドが転倒したらサードはザイルを離し、セカンドが除々に岸へ流されるようにすること。サードが離すか、トップが離すかはポイントの状況による。また、ザイルを離した場合サードに対しザイルを投げるようになるが、石などをつけて投げると失敗した場合回収できなくなるので、むしろ木の方がベターではないか。もちろん、何もつけないで投げて対岸に届けばそれにこしたことはない。

（記 若林岩雄）

